

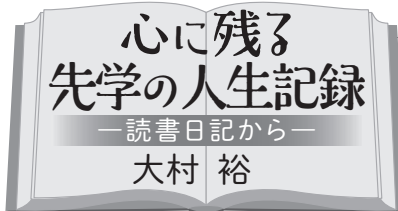
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.197  
2020.2.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第14回

## 酒詰仲男『貝塚に学ぶ』

(学生社 1967年)

貝塚研究の権威・酒詰仲男博士(1902~1965年)の自伝である。この本を初めて手にしたのは、1971年。その後何回読んだか数えきれない。特に私が千葉県香取郡市域の遺跡分布調査をほとんど一人で行っていた時代(1971~1978年:一部矢戸三男氏との共同調査)は、利根川下流域全域の縄文遺跡をすべて踏査し、いつの日か酒詰先生の「神奈川県下貝塚調査概報」(1938年)のような報告をまとめてみたいという夢を描いていたので、この本を座右に置き、折に触れ気に入った頁を繰っては孤独を紛らわしていた次第であった。

さて、『貝塚に学ぶ』(以下「自伝」と略称)は、私の世代前後の縄文文化研究者ならば、大体一度は目を通していただろうから、あまり詳細な紹介は必要ないだろう。ただし、若い人たちは半世紀以上前(1965年)に亡くなった酒詰博士に対する知識・関心が乏しいかも知れないので、本書以外の情報も加えて生誕から考古学入門前後の諸事情を書いておこう。

酒詰仲男は1902年生まれ。京都府立京都第一中学校(東京の開成中学から家庭の事情で転校)卒業後、同志社大学予科を経て、同志社大学文学部英文科を卒業している。同志社では、生物学者の山本宣治(後、労働党から衆議院議員となり、治安維持法の改悪に反対したため刺客に襲われて落命。日本共産党と深いつながりがあったと言われている)に強い影響を受けていたという(鈴木重治ほか「酒詰仲男の人と学問」『貝塚研究』2号 1997年)。

大学卒業後は母校の開成中学の英語教員となるが、同僚の英語教師の石田外茂と親しくなって、日本史の共同研究を始めている。この時のテキストは佐野学(日本共産党幹部)の『日本歴史』であった。この頃、社会主義運動に関わっていた友人に引きずられるような形で「シンパ」として活動するようになり、とうとう1933年には、「6.15研究グループ」の一員として特高警察に検挙され、拷問を受けている。酒詰の前歯は数本欠けていたが、それはこの折の傷跡であると芹沢長介が証言している(「あとがき」『日本考古学選集 22 酒詰仲男集』築地書館 1975年)。拘留中、「以後政治運動は絶対にやらないこと」「歴史の勉強を徹底してやって、なんとかそれを生涯の仕事としよう」と決意したという。その理由は、「生涯まず前向きな学問をやって、そんなことで将来の社会に、幾分たりとも役に立ちたい」ということであった。自伝では前後の説明がなく、かなり唐突な印象を受けるが、「(学問を通じて)将来の社会に、幾分たりとも役に立ちたい」という決意は、記紀神話に基づく「皇国史観」を打破し、「国体」の虚構を打ち崩して、将来の民主国家の礎を構築したい、という当時のマルクス主義考古学・古代史学者通有の考えに根差しているように思われる。ちなみに酒詰が逮捕されたその年に、治安維持法違反で拘留されていたマルクス経済学者・河上肇が、「獄中独語」(共産主義者の雪崩的転向を生み出した手記)を新聞紙上で発表している(1933年7月)。そこには、「実際運動」とは訣別し、書齋に隠居して資本論の翻訳を

生命のあるうちに完成させて「安逸をむさぼる罪の幾分を償いたい」とある。その根底には、「真理」(マルクスの思想)を広く普及させて、未だ封建的思考から脱皮出来ていない日本国民の蒙をひらきたい、という願望が込められているように思われるのである。酒詰の考えにほぼ類似していることが理解できるであろう。私は、酒詰に上記の決意を促したのは、河上の「獄中独語」なのではないかと推定している。釈放された後、階級発生以前の原始社会の研究に目標を定めた酒詰は、一時無給所員として大山史前学研究所に通い、基礎的な勉強を始める。しかし、公爵・大山柏が設立したこの研究所は、酒詰の肌にあまり合わなかったらしい。ここでは、〈昼は皆でテニスをやり、午後3時にはお茶を飲む〉というのが日課であったというのである(岡田茂弘ほか「酒詰仲男博士の貝塚研究の方法と残された課題」『貝塚研究』6号 2001年)。このような雰囲気は、食うや食わずの生活に耐えて、「死ぬような思い」で考古学研究に打ち込もうとしていた酒詰には耐えられないことであらう。

こうした感情的反発の他、種々の事情も重なって同研究所を離れた後は、中学生の芹沢長介や江坂輝弥といった考古少年と小規模な発掘を繰り返し、その過程で『貝塚』というユニークな考古情報紙を独力で刊行することになる。そして、このパンフレットの編輯・刊行を通じて國學院大學学生たちとの交流が強まっていったのであった。

1938年のある日、東京帝国大学人類学教室に『人類学雑誌』を見にいった折に、同教室に着任したばかりの長谷部言人から声を掛けられる。何と、同教室の囑託にならないかと誘われたのである。この一件は偶然ではなく、親友の和島誠一の紹介によるものだという(武井則道「和島誠一の志村遺跡の発掘」『時代を拓いた男と女』板橋区立郷土資料館 2007年)。この日、家に帰ると「畳に仰向けに寝ころんで、天井をみつめながら、つぎつぎに眼に湧いてくる涙を、ぬぐおうともしなかった」という。開成中学免職後(特高に逮捕されたため)の生活について、酒詰は自伝で何も書いていないが、服部報公会からの研究費や洋書の翻訳などで何とかしのいでいたようである。親しかった芹沢長介には、「新聞配達をやるかと思っているんだよ。今は無収入だからね」とも語っていたので、余程窮迫していたのだろう。学者として立って行く見通しが全くない中で、長谷部による勧誘がどれほど有難かったか、察するにあまりある。と同時に、全く光明のささない「どん底」の生活の中でも、斯学に対する情熱を燃やし続けていた酒詰に対し、私は深い尊敬の念を抱くものである。

東京帝国大学就職後の活動については、逐一紹介する紙幅は既にない。昭和初期における日本先史考古学界の情勢や雰囲気を知る上で、この本は極めて有益であることは強調しておこう。この本は、終始穏当な筆致で叙述されているが、東京帝大在職中における酒詰の本音は、2008年から継続的に刊行されている『酒詰仲男 調査・日録』(酒詰治男編 東京大学総合研究博物館 標本資料報告)において赤裸々に記されている。

※巻頭連載は隔月です。今回は鈴木正博さんです。

## 目次

■心に残る先学の人生記録 一読書日記から一 (第14回) 大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト (第190回) 村瀬 陸 …3
■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました (第11回) 井川史子 …2	■考古学者の書棚 「教えない授業」 村上賢治 …4

## 考古学の履歴書

## カナダで米寿をむかえました(第11回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

## 11. 太平洋学術会議と国際人類学民族学会議

1966年の8月末から9月始めにかけて第11回太平洋学術会議(Pacific Science Congress)が東京と京都で開催されることになっていた。これを目指して来日する機会に日本の旧石器のことをいろいろ知りたいという連絡をレニングラードの考古学研究所、旧石器部門のポリスコフスキー(Pavel I. Boriskovsky)教授から頂いた。実はわたくしもこの大会に参加するのを楽しみにしており、その際に日本の先生方から新しい資料に関する情報を教えていただいたり、遺跡や遺物を見せていただくのを期待していたのだが、前回で述べたような事情で、トロント大学とのコネが春学期末でできてしまうので、同大学から旅費援助をもらう可能性はなくなったし、いずれにしても1966年の夏は引越して忙しいことになったので、太平洋学術会議出席は見送ることになった。ポリスコフスキー教授にはその旨おつたえして、日本の旧石器のことなら芹沢長介氏にぜひお会いになるようにお勧めし、芹沢氏にもお知らせしたら、連絡がついたことをどちらも大変喜ばれたようだった。

この第11回太平洋学術会議はそれまでに日本で開催された学術会議としては最大の集会だったとサイエンス誌1966年12月6日号に報告されている。参加者総数6000名、うち国外82国からの参加者2200名で、考古学関係の学者も世界各国から多数参加されたようだった。芹沢長介氏から会議後にいただいた書簡によると、いろいろな方にお目にかかれて、大変有益だったとのことだ。前述のポリスコフスキー教授、第8回で言及したウイスコンシン大学のチェスター・チャード博士とその門下生のビル・アーヴィング(William Irving)や、リチャード・モーラン(Richard Morlan)とヴァルダ・モーラン(Valda Morlan)夫妻たち、そしてオーストラリアから来られたマッカーシー(Fred McCarthy)、マルヴァニー(John Mulvaney)氏たちを東京鎌田の芹沢宅に招かれてビールなど飲みながら賑やかに懇談されたとのこと。そして、その数日後はエモリー(Kenneth P. Emory)、シャトラー(Richard Shutler, Jr.)などハワイ関係の考古学者12名ばかりが仙台の東北大学の研究室をお訪ねして石器類を見学して行かれたとのこと、太平洋学術会議は考古学にとっても国際的な情報交流の場として有効だったようだ。

そのような情報交流の場に同席できなかつたのは残念だったが、2年後の1968年に9月3日から10日までやはり東京と京都で開かれた第8回国際人類学・民族学会議にはウエンナーグレン(Wenner Gren)財団から旅費をいただいて参加することができた。私は8月28日に東京に着き、会議前に仙台の芹沢氏をお訪ねした。新大陸の先史時代研究で有名なウォーミングトン(H. Marie Wormington)博士と前述のリチャード・シャトラーが9月1日は一日中仙台の芹沢氏の研究室にこられたので、日本の旧石器の実物を目の前にしながら、アメリカやオセアニアの先史時代遺物との相似と相違についてのご意見を伺うことができた。

東京でのセッションでは「ユーラシア北部と新大陸との先史時代における文化交流の視点からみた日本の旧石器文化」と題する発表をした。

東京でのセッションでは「ユーラシア北部と新大陸との先史時代における文化交流の視点からみた日本の旧石器文化」と題する発表をした。

▲日本出土の矢柄研磨器  
出典：『日本民族と南方文化』P77、  
金関丈夫博士古稀記念委員会編(平凡社/1968)

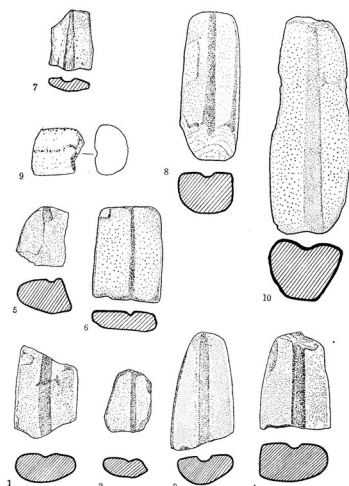


図4 日本発見の矢柄研磨器 1-5. 岐阜県花ノ宮、6. 岐阜県中野、7. 山形県一ツ沢、8. 山形県松山、9-10. 北海道東川町。縦尺1-8、10: (1/4); 9: (1/2)

ICUのキダー先生と京都大学の樋口隆康先生が座長を務められたこのセッションでは、東大の赤沢威と渡辺仁両氏による魚骨の研究法についての発表があり、トロント大学のビル・ハーリー(William Hurley)が土器表面に見られる縄のねじり方の比較研究法が北米と日本でちがうことを指摘し、ハワイ大学のリチャード・ピアースン(Richard Pearson)が韓国の考古学者イム氏(Hyo-Jai Im)らと共同で研究し始めた済州島の文化交流における重要性を論じ、そして韓国の研究者数名が研究発表されたほか、山内清男先生が金関丈夫博士古稀記念論文集(1968)に寄稿された力作の一部を発表された。「世界の先史時代における矢柄研磨器と縄文年代論」と題する山内氏の発表の趣旨は縄文草創期遺跡から出土する矢柄研磨器がユーラシアで初めてみられるのは2500BC頃だから、縄文時代の開始はそれを遡ることはあるまいということで、第6回で触れた植刃論と同様の論旨だ。

私はこのほかに「ユーラシア北部と北米大陸北部との先史時代における文化交流」というテーマのシンポジウムで「日本の旧石器文化編年とアジア大陸との関係」と題した芹沢氏のペーパーを代読し、質疑応答に当たっては通訳をつとめた。チャード博士を座長としたこのシンポジウムにはロシアからオクラドニコフやヴァシリエフスキー(R.S. Vasilievsky)、それにカムチャッカ研究者のディコフ(N.N. Dikov)が参加しており、アメリカからはミシガン大学の重鎮、ジェームス・グリフィン、デンマークからヘルガ・ラーセン(Helga Larsen)、そしてカナダのチャールス・ボーデン(Charles Borden)やビル・アーヴィングが発表しており、テーマにふさわしい国際的な議論の場となった。

この会議を回顧して、日本大学の金沢栄作博士は次のようにのべている。「この会議は敗戦の混乱から復興し、研究活動や国際活動を開始した日本の人類学者達の献身的な努力により運営されたが、学問の内容的にも、また会場や接待などの運営面でも高い国際評価を受けた」(Anthropological Science, vol.116, p.55, 2008)。運営面に関する国際評価については私自身の記憶を付け加えておきたい。この会議が開催された1968年の夏は「安田講堂事件」など、全共闘運動が継続中で、予定されていた会場へのアクセスが不安定になったために、急に会場を変更することがあったりしたが、そういった緊急措置がまことにスムーズに執行されていたのについて外国から来ていた参加者が感心してコメントされていたのをおぼえている。

もうひとつ付けくわえると、この会議は企画委員会長をつとめられた岡正雄先生にとっても多年の夢が実現されたということではなかったかとおもう。この「履歴書」の第1回でご紹介したように、岡先生は戦前にウィーンで民族学を勉強され、人類諸科学と連結した民族学を日本に導入することに務められた方で、東京都立大学社会学教室の主任教授でいられたとき助手補に採用して下さったのが私の文化人類学入門のいとぐちになったといういきさつもある。会議中はお忙しくお話しする機会はなかったが、たまたま廊下で、お会いした際に第8回国際人類学・民族学会議のご成功についてお祝いを申しあげた。

略歴	
1930年	神戸市長田村房王寺谷【現在:神戸市長田区房王寺町】に生れる
1948年	奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現:奈良女子大学付属高等学校】
1953年	津田塾大学英文学卒業
1953-54年	東京都立大学【現:首都大学東京】社会学研究室助手補
1954-55年	東京都立大学大学院社会学研究科(社会人類学専攻)修士課程
1955年	フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学
1958年	ラドクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部【現在:ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学)
1958年	ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)
	1974年にハーヴァード大学人類学部に博士論文を提出、PhD授与
1964-66年	トロント大学人文学部人類学 非常勤講師
1967-69年	マギル大学人文学部人類学 非常勤教員
1970-2003年	マギル大学人文学部人類学 専任教員;2009年以來名誉教授
1999-2000, 2004-2007年	カナダ日本学会会長
2004-2012年	東亜考古学会会長
2005年	瑞宝小授章
2017年	カナダ日本学会ライフタイムサービス賞

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。

## Uレエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 190

## 奈良町遺跡の刀装具生産遺跡 ～奈良県奈良市～

村瀬 陸

私が紹介するのは、2015年、学生時代から続けていた銅鏡や埴輪に関する論文を投稿するため研究する傍ら、就職2年目で初めて一人現場として調査した奈良町遺跡である。

奈良町遺跡は、平城京が長岡・平安京へ遷都した後、興福寺や元興寺を中心に栄えた都市遺跡である。私が調査したのは、奈良市柳町というJR奈良駅の東約500mの場所で、奈良町遺跡としては西端にあたる。また、地形的に旧河川が想定される場所であり、一人現場にはちょうど良いとのことに向かったのである。

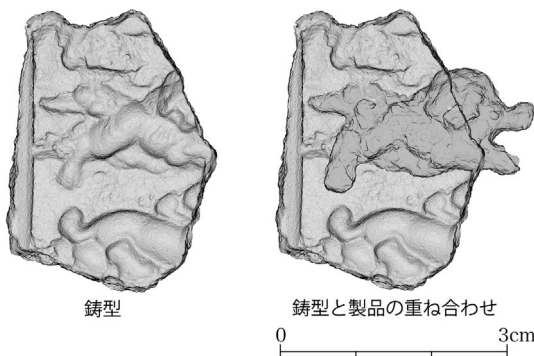
調査を始めると想定通り旧河川がでてきたが、場所を変えて掘削を進めると河川の東肩と遺構面の残存する部分が見つかり、多数の中世粘土採掘穴に混じて焼土を含む土坑がいくつか並んで検出された。この土坑からは、表面がガラス化するほど高温で溶けた埴塼、刀装具の鐔や目貫の鋳型などが17世紀前半の土器と共に多数出土した。土坑のすぐ北側には炉の床面だけが残存する遺構があり、刀装具を鋳造した遺跡であることが判明した。近世考古学をほとんど学んでこなかったため、調査当時は少し珍しいものが出てきたのかな、という認識であったが、土坑埋土を全て持ち帰り洗浄すると想像以上に重要な遺跡であることがわかってきた。

まず、刀装具に鋳造品があることは知られていたが、多くは鍛造品であると認識されており、鋳造を示す鋳型が埴塼等と共に出土したのは日本で初めてであった。さらに、埴塼は一般的な鉢形のものでなく、把手付・三足付埴塼といった特殊な形態のもので100点以上出土した。これらの埴塼は先行研究で真鍮用であることが示されており、今回の出土品も分析の結果、真鍮用であることが判明した。重要なのは、真鍮は銅と亜鉛の

合金であるが、合金として使用した例は平安時代から確認されているが、その製造は江戸時代中期以降とされてきた。しかし、今回出土した三足付埴塼は、蓋をして目張りしたもので、真鍮製造を証明する埴塼であった。これにより、



▲三足付埴塼



鋳型

鋳型と製品の重ね合わせ

0 3cm

▲奈良町遺跡出土の目貫鋳型と製品の三次元計測モデル

江戸時代初頭には真鍮を製造し、製品を鋳造するために使用していたことが明らかとなった。

このように、日本初・最古といった重要な事例が一挙に舞い込むという事態に、これらを自身の研究テーマのひとつとして今後進めていく覚悟を決め、日本学術振興会の科研費研究および、奈良大学西山要一名誉教授との共同研究を進める運びとなった。

私が科研費を得て実施しているのは、出土した刀装具鋳型および製品の基礎研究である。近世考古学の歴史が浅い上に、調査例の少ない中近世刀装具はまとまった基礎研究がない。さらに出土した鋳型は、鋳造時に被熱し黒く焼けており、観察では文様等が全くわからなかった。近年進む三次元計測が有効であることは予測していたが、多数の資料を計測してもらう余裕がなく、自らやるしか手立てがなかった。いくら安価で出来るというSfMでも機材を揃えるのに50万円近くは必要となる。そこで、教育委員会職員でも科研費の奨励研究に申請できるという情報を得て、幸いにも採択を受けることができた。

SfMによる三次元計測は、奈良文化財研究所員の方々から1日教わり、自ら実践するなかで、それらしくモデルを生成することはすぐにできるようになった。甘い部分も多くあるのだろうが、助成期間の1年で成果を出す必要があったため、がむしゃらに鋳型を計測し続けた。その結果、当初想定した以上に豊富な意匠があることが判明し、多量生産を可能とする込型技法により鋳型が製作されたことも明らかとなった。

今年度も科研費の採択を得て、発掘調査で出土した目貫の分析を進めている。奈良町遺跡出土品は、全てが鋳造品とみられ、そのうち一点は鋳型と一致することが判明した(挿図)。ただし、全て銅製であることや、多くが鋳型と一致しないことから、搬入された見本原型であろうと考えている。ほかにも神戸市兵庫遺跡、京都市内、東京都内などの出土品を分析しているが、多くが鋳造品であることが判明している。従来、目貫は伝世品の多くが鍛造品であるため、鋳造品は一部の粗悪品と思われてきたが、広く一般階層には鋳造品が出回っていたであろうことが明らかになりつつある。

研究途上ではあるものの、元々銅鏡や埴輪を中心に研究を進めていたはずが、近世刀装具研究が今一番面白くなっている。でも、これに浮気をしていると本命が本領を発揮してくることもある。2019年11月、調査を担当する富雄丸山古墳から斜縁神獣鏡が出土してしまったのである。おまけに前期埴輪研究の指標資料となりうる良好な埴輪列まで出てきてしまった。興味の幅が広いと飽きずに考古学を楽しむことができる。色々な意見があるろうが、私は常に自分が関わる遺跡からテーマを見出すスタイルを貫きたいし、このスタイルを多くの学生や学友と共有していきたい。

本稿はJSPS科研費19H00013の成果の一部を含む。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは泉 真奈さんです。

## 考古学者の書棚

## 「教えない授業 美術館発、「正解のない問い」に挑む力の育て方」

鈴木有紀著／英治出版株式会社(2019)

村上 賢治

博物館・美術館の楽しみ方は人それぞれである。新たな知識や情報の取得は楽しく、悪いことではない。しかし館から帰宅して展示を振り返った時、展示品の記憶がなく、解説ばかりを読んでいたことに気づいたことはないだろうか？

私が博物館勤務となり、サービスを提供する側となって感じたことの一つが、「もっと自由に展示品を見て、楽しんでほしい」ということである。その方法を模索する中で、美術鑑賞の手法に対話型鑑賞というものがあることを知った。美術作品についての情報や解釈を、作品そのものから鑑賞者が感じ、それを尊重しながら、グループでの対話を通して味わっていく方法で、1980年代にニューヨーク近代美術館で開発された鑑賞教育プログラムがその始まりといわれる。

その後、愛媛県美術館で対話型鑑賞を体験する機会があった。美術作品にはあまり興味がわかない私に、他の観覧者と一緒に一つの作品をじっくりと鑑賞し、楽しい時間を過ごした。対話型鑑賞の有効性を実感した体験であった。

2019年4月、対話型鑑賞入門にふさわしい本が発行された。本書は、愛媛県立美術館が2015年度から4年間、文化庁の補助を受け取り組んだ「えひめ「対話型授業」プロジェクト」(対話型鑑賞を美術鑑賞だけでなく他の教科に活用・普及していった取り組み)をベースに、対話型鑑賞の有効性と可能性を分かりやすく紹介した、『「対話型鑑賞」の入門書』(本書の帯より)といえる。著者は同館学芸員の鈴木有紀さんである。

全体は8章から構成されており、「はじめに」では各章の概要が簡潔に記されている。また各章内は、5～10のタイトルがついたパートに分かれているため、読みやすく、見返しやすい構成となっている。

- 第1章 問いかけの魔法 対話型鑑賞とは何か
- 第2章 学びを促す仕掛け 対話型鑑賞の四つの柱
- 第3章 ある日の「教えない授業」
- 第4章 対話が生まれる理由 授業の中で起きていること
- 第5章 ささまざまな分野で 「対話型授業」
- 第6章 ナビゲーションの実践
- 第7章 よりよい学びの場づくりのため
- 第8章 対話型授業がひらく未来

第1章では、対話型鑑賞の特徴や可能性について説明している。対話型鑑賞が、「教える」のではなく、「問いかける」ことにより「主体的な学び」を可能にするものであり、2020年から導入される新指導要領の「主体的・対話的で深い学び」の視点等にも合致することが述べられている。

『美術館で作品を見ると、解説文を読み、作品を「知る」ことにまず意識を向けていることが多いようです。情報を「知る」ことを意識しすぎるために、作品をまず自分の目で「みる」ことができなくなってしまう面があるのではないのでしょうか?』という問いかけには、頷く方が多いのではないだろうか。

続く第2章では、対話型鑑賞に不可欠な以下の4本の柱を解説している。

## ①鑑賞者を考慮した「視覚教材」

対話型鑑賞における視覚教材選びの重要性を指摘している。

## ②四つの基本プロセス「見る・考える・話す・聴く」

対話型鑑賞は、まず「じっくり見る」ことから始まる。次のステップ「考える」は自分の中で考えることで、論理的思考を促すことになる。考えたことを言語化することが「話す」。そして、最後のステップが人の意見に耳を傾ける「聴く」である。

## ③さらなる観察や思考を促す「問い」

対話型鑑賞で使う適切な「問いかけ」について述べている。とくに「どこからそう思う?」と「どうしてそう思う?」という2つの問いかけの、この微妙な差が生む効果の違いは、言葉選びの大切さに改めて気づかせられる。

## ④ふりかえり

授業後のふりかえりでは、気づいたことや考えたことを言語化することが、学びを深化するために必要である。

第3章では、実際に小学校で行われた授業の記録をもとに、対話型授業の流れを再現しており、実際の授業の流れを感じることができる。

第4章は、前章の解説であり、授業中に「何が起きていたのか、なぜ豊かな体験が生まれるのか」について述べられている。対話型授業では、教員の役割はナビゲーターであり、「教える人(先生)」と「教わる人(生徒)」という関係性ではない。「みんな」で「一緒に」「話していこう、考えていこう」というスタンスである。また、対話型鑑賞で重要な問いかけである「どこからそう思う?」の効果として、「さらに作品をみることを促す」「考えを引き出す」「論理的思考を促す」「話を共有しやすくなる」と4つの効果をあげている。

第5章は、本プロジェクトにおける、様々な教科での取り組み事例を紹介している。社会科、国語、理科、特別支援学級、そのほか多くの科目におよんでいる。また対話型鑑賞が、学校のみならず企業内でも注目されつつあることから、応用への無限の可能性も指摘されている。

第6章には対話型鑑賞のナビゲーターのための、実践上のポイントが記されている。対話型授業における準備、授業中のナビゲーターの動き、授業後の振り返りについて要点がまとめられている。

第7章は、実践に際してやってしまいがちな失敗例や注意点があげられ、対話型鑑賞に取り組もうとする者にとって、大変参考になる。

第8章では大学やビジネス界などでの取り組みを紹介しながら、対話型鑑賞の学び方やスタイルのこれからの可能性について述べられている。

博物館・美術館では、来館者から解説を求められることがある。その際話し手主体の解説は来館者には届かない。人が物事を理解する時に基礎となるのが経験であり、当然それは人それぞれ異なっているからである。来館者の経験から出てくる感想や意見をまず受けとめ、一緒になって展示物を見ていく、「教えない」対応は、来館者の好奇心を揺さぶり、博物館・美術館をもっと楽しく魅力的な場所にするのではなかろうか。本書は、そのための一歩を踏み出すための拠り所となる一冊である。

## アルカ通信 No.197

発行日 2020年2月1日  
 企画 角張淳一(故人)  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801  
 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp  
 URL : http://www.aruka.co.jp